瀋陽だより

2015 年 7 月号

日本文化クイズ大会（高等部＆国際部）

東北育才学校派遣教員　高井　奈央子

6 月 30 日、東北育才学校国際部で、日本文化に関するクイズ大会が行われました。対象は国際部に通う子どもたちです。日本語ができない子どもたちのほうが圧倒的に多いので、高校 2 年生の日本語クラスの生徒が問題作成と英訳・中国語訳を担当し、国際部の日本人の子どもたちに韓国語訳をお願いしました。

今年初めての試みだそうで、機材の確認や場所の確保からスタートしたイベントでした。私も当日まですっかり失念していたのですが、クイズには日本人の子どもたちも参加できます。もし来年もこのイベントをやるなら、クイズの内容を変えるか、参加資格を変えるか、どちらかにすべきだと思いました。というのも、写真を見て分かる通り、日本人の子どもたちにしてみれば、問題が簡単すぎて、クイズとして成り立たなかった部分があったからです。

高校生は、こういったイベントを自分たちで行う経験があまりなかったようなので、準備に手間取ったことも含めていい経験になったのではないかと思います。

中国制服事情

中国の学生たちの制服は、学校指定のジャージです。体育の授業も普段の授業もそのジャージのままなので、彼らの荷物は日本の学生より少なめだと思います。「学生がおしゃれをする必要はない（必要なのは勉強だ）」「必要なときに必要なものだけあれば良い」という考え方がベースにあるようで、前者の理由は日本でもお馴染みです。

ただ、卒業写真を撮るときには、このジャージは良くないと考える生徒が多く、写真撮影時には各々、お気に入りの私服を着て並んでいました。

高校生になると、ジャージでは満足できなくなるようで、いろいろと工夫し始めます。それぞれが私服で学校生活を送るというのも彼らにとっては少々面白味に欠けることらしく、クラスごとに好きな制服を決めて注文しています。自分の好みの服を着たいという気持ちもあるし、みんなとお揃いのものを着たいという気持ちもあるというちょっと不思議な人間の心理のようです。

私自身、学生時代「制服さえ着ていれば怒られることはないから、便利だ。私服を着たり買ったりするのは面倒くさいから、できれば大学も制服があるところがいい」などと考えていた人間なので、共通の服を着て安心したいという気持ちはよくわかります。

また、日本のアニメの影響で、右写真のような冬用クラス共通パーカーを作ったクラスもありました。

これがクラスの総意に基づく選択なのか、主導権を握っていた生徒の好みなのかは不明ですが、最初にこのパーカーを発見したときの衝撃は今でも忘れられません。

このパーカーを使用していた生徒たちは、今年の 10 月から日本に留学します。日本で気の合う友達を見つけることができますように。

中国ライフ～九・一八歴史博物館へ行く

せっかく瀋陽に住んでいるので、九・一八歴史博物館へ行ってきました。馬路湾からバスで 40 分ほどのところにあって、入館料は無料でした。1931 年 9 月 18 日（中国では国辱の日）の柳条湖事件が起こった場所に建てられています。

抗日戦争の記録をジオラマで再現したり、当時の写真を展示したりしているスペースが大部分でした。中には直視しがたい残酷な写真もあったのですが、これも勉強だと思って一通り見て来ました。

私の中国滞在中の事務手続きをしてくれている中国人女性も「あそこは残酷な写真があるから好きではない」と言っていました。「でも日本人は、ああいう写真を見たことがないでしょう？」という言葉はそのとおりで、少なくとも日本の教材には掲載されていない資料が多数ありました。

個人的には、抗日戦争を戦った数名の女性にスポットを当てた展示が印象的でした。よくあるパターンで、女性であるがゆえに、英雄として取り上げやすいという背景があるように思えたからです。残念なことに、私の知り合いにはジェンダーに詳しい人がいないので、専門家の意見を聞く機会もないまま、現在に至っています。学生時代にもっと真面目に勉強するべきだったと後悔しました。

全体を見終えて思ったことは、「戦争」に至る過程、最中に行われること、終

結後に残る問題は世界共通なのではないかということでした。共通であるにもかかわらず、回避することができず、現在でも、世界中至る所で同じことを繰り返してしまっていることが恐ろしく思えました。

念のため、事前に「九・一八に行こうと思うんだけど」と中国人の先生に相談したところ「たぶん大丈夫だと思うけど、日本語は使わないほうがいい」というアドバイスを受けました。私がそこで嫌な目に遭うかもしれないと心配してくれたようです。

しかし、行ってみると、中国語・英語の解説の横に、日本語の解説もありました。ということは、施設側としては日本人にも来館して見てほしいというスタンスであるように思います。

この日は休日だったのですが、見たところ私以外に日本人は来ていないようでした。（もしかすると、私と同様に、日本語を話さないようにしていたので気づかなかっただけかもしれませんが。）

「国」という不思議な概念は、いともたやすく「個」をなぎ倒してしまいます。それが戦争の恐ろしい点なのではないでしょうか。

個人として話し合ってみると、喜怒哀楽のある人間同士、意思疎通が可能であるのに、〇〇人という国のレッテルを貼った途端、上手くいかなくなってしまい、その延長線上には戦争という最悪の事態が待っています。

「日本から来たの？じゃあ肉まんオマケね」と言ってくれた店員さんも、「高速鉄道の切符を買いたいんだったら、ついて行ってあげますよ」と言ってくれた先生も、「雨が降り始めて、先生が困っていると思って」と傘を持ってきてくれた生徒も、「国と国」という話になった途端にかき消されてしまう恐れがあります。

イメージに飲み込まれないこと、それはとても難しいことですが、今の時代にこそ必要とされていることだと感じました。